書　　評

中村沙絵.『響応する身体―スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌』ナカニシヤ出版，2017 年，404 p.

野村亜由美 *

本書は，スリランカ西南海岸地域および北中央州において，2007 年 2 月から 2010 年 5 月に断続的に行なわれた現地調査に基づいて書かれた重要な著作である．本書は，ヴァディヒティ・ニヴァーサ（老人施設，以下「ニヴァーサ」とする）での日常を描きながら，苦悩を抱える他者とともに生きていこうとする人びとの間で，老病死を支える関係性がいかに築かれているのかを問う．特に本書の中心となるのは，ニヴァーサにおいて日常的に行なわれる「ダーナ」（他者への施し，自己の積徳行為，布施）実践や，相手に対して表明される「パウ」（可哀想，気の毒な，罪）という感情表現を軸に，入居者と施設内ではたらくフロアスタッフ，そして施設外のコミュニティとの間で，互いの関係性がどのように構築されているのかという点である．

「響応する身体」という表題は，他者の身体を生きてしまう，あるいは他者の身体を通して自己を生きるような身体を意味する (p. 31)．「響応する身体」という他者に対して開かれた身体の在り方の理解を可能にしているのが，著者自身がニヴァーサに同居して収集した「生」をめぐる詳細な語りの記述であり，本書で重要なタームとなっている宗教的実践としての「ダーナ」をめぐる人類学的記述であろう．本書で一貫していることは，スリランカ社会の「西洋近代化による家族や共同体の崩壊・解体」という一般的認識からは距離をおき，ニヴァーサで展開する日々の営みに寄り添いながら，そこで構築されつつある関係性の様態を検討するということである．まず本書の構成について簡単に紹介する．

本書の序論では，スリランカにおけるニヴァーサの社会的位置づけと，「結節領域」としての施設の内外に遍在する，儀礼としてのダーナ，業や積徳といった宗教的記号などを含む「文化的装置」について理論的解説がなされている．序論に続く章は，3 つの部分から構成されている．第一部（第 1，2 章）ではまず，高地シンハラ農村社会の事例を紹介しながら，現代スリランカの老年扶養をめぐる規範と実態が描かれる．次に，本書が主に取り上げるニヴァーサがある西南海岸地域の概要を述べたあと，本研究の鍵概念となるダーナ，パウ，ピン（功徳），カラキリーマ（人生への失望）などについて概観しながら，「ダーナ」と「パウ」が現地においてどのような事象を指し，どのような用法において使用されているかについて述べられている．第二部（第 3 章～5 章）では，イギリス植民地時代に導入された慈善収容施設を，現地の政治社会的な動き―現地化／脱植民地化していく過程―や主要なアクターと関連づけながら，外部に開かれた施設として成立した歴史的系譜を明らかにしている．またニヴァーサ

* 東京大学大学院総合文化研究科

を「結節領域」として，入居者たちの生活を物理的に支えるダーナが具体的に施設外部のアクターと入居者とのいかなる関係の上に成り立っているのかに着目する．第三部（第 6 章～8 章）は，ニヴァーサにおける老いと死，看取りについての微視的な民族誌である．ここでは入居者たちが不満や苦悩などを抱きながら，いかにして施設での生活を成り立たせているのかということが主な論点となっている．著者は「老いを生きる」彼らの経験／語りを通して，他者と経験や悩みを共有することで新たな関係性のなかに自らを位置づけ，苦悩と付き合おうとする人びとの姿を描く．

以下ではまず，本書の重要な概念である「響応する身体」がどのように位置づけられているのか，そしてそれらの身体―間の共感を可能とする論理的な要素として，「ダーナ」をめぐる相互性，最後に「ダーナ」や「パウ」を媒介とした関係性の広がりという 3 つの点について概観したい．

1. 響応する身体―死を超えた来世とのつながり

施設で調査をはじめた著者は，あまりにも「あっけない死」を遂げる老人たちを前に，「死に行く人」を取り囲む入居者やスタッフたちが口にする「気の毒だ」「こうはなりたくない」「人生に絶望する」などの否定的な表現に違和感を覚える．著者の目に映る日々の光景は，老人たちを「人間として扱っていない」と思える行為だったが，彼らとともに過ごすなかでそうではないことに気が付く．

著者のスリランカでの経験において明らかになったことは，ニヴァーサを起点として，そこで生活する身寄りのない高齢者たちを支える関係性が，「ダーナ」と「パウ」によって成り立っていること．さらにニヴァーサが入居者たちの要望に応えようとする場である以上に，他者の苦悩に共鳴し，苦悩を抱えた他者の身体を生きてしまうような契機が常に潜んでいる場であったということである．このような経験が可能となるのは，ニヴァーサという空間が「死にゆくこと」に抗うような生の営みの場ではなく，彼らの身体と自己の身体とが空間と時間を超えた連続性のうちにあるからであったと解釈できる．ダーナの授受をはじめとする日々の宗教実践の反復的行為は，「いま―ここ」が，「死」を超えた「来世」との関連において意味づけられるような空間をつくりだしていた．ダーナは，施主が入居者を「パウ」と思いながら行為する場を創出すると同時に，自らの生の偶発性への反省や気付きを促してもいた．

2. ダーナをめぐる相互性―反転

ニヴァーサで日常的に行なわれるダーナ儀礼は，入居者がダーナの受け手として施主の「パウ」な存在を認識し，その行為を積徳行為として認知するような場として展開する（p. 32）．ダーナを与える／受けるという場において，入居者は施主の意図を認知し，ダーナの受け手として相応しい態度を貫くことで施主を配慮する側にまわる．このように，ニヴァーサにおけるダーナ儀礼には，自らが憐れむべき存在だからこそ恩恵に与るという，単なる喜捨の受け手としての論理をず

らすような読み替えが見受けられる．それではなぜ，このような読み替えが起きるのか．

筆者によれば，これらの読み替えは単にオーソドックスな（英国，あるいは欧米諸国発の）チャリティの論理を取り入れたのではなく，スリランカで伝統的に行なわれてきた僧侶への追悼供養のダーナという慣習的実践を媒介に現地化をしていく過程において生まれたものである．具体的には，慈善収容施設が富裕層からの寄付だけでは成り立たなくなり，試行錯誤のなかで中間層に呼びかけ，期待に応えるなかでつくられてきた運営形態がニヴァーサにおけるダーナであった．ニヴァーサをはじめとする現在の慈善収容施設のかたちを，筆者は「近代性をめぐる実験の産物」であると指摘する（pp. 134-138）．本書では割愛されているが，たとえばキリスト教徒である運営者が，ダーナがよく集まることを「幸運を神がもたらした」と表現する一方で，公的な場においては入居者によって転送された「功徳（*pin*）」によるものだと説明するというようなことも，施設におけるダーナ実践が複数の近代の産物であることを示しているといえよう［中村 2011］．

3.「ダーナ」や「パウ」を媒介にした関係性の広がり―ニヴァーサで生きる人びと

生涯を通してニヴァーサでの生活を余儀なくされ，日々の生活や「ここに居る意味」を「苦」と考える入居者たちは，ただ施設のなかで完結して生きているのではない．入居者たちはダーナの受け手として，「パウ」な存在としてのみではなく，ダーナの周辺に積徳行為を生み出す機会を見出しながら，時には積徳行為の主体，そして時には他を配慮し養う者へと移ろうような多様な展開のなかで生きている．筆者はこれらの配慮の関係性の連鎖のなかに，入居者たちの日常実践が位置づけられていると考える．さらに著者は，この施設で働くスタッフたちにとって，ニヴァーサの入居者が経験している／してきた苦悩を同じようにわかることはできないが，私もあなたでありえたという生の不確実性と不可避性を引き受け，苦悩のただなかにいる「他者」としての彼らに「善く」働きかけることが，彼女たち自身の未来へ働きかける方途であり，響応する身体―間の経験から生み出されたひとつの肯定的な態度だったのではないかと述べている（p. 348）．この場合の「他者」というのは，「自己」と分離されるものではない．「私もあなたでありえたという生の不確実性と不可避性」という偶有性の次元にある非分離な間身体性―他者に対して互いに開かれた関係をつくりだすような身体―を生きるということを意味するのであろう．フロアスタッフに焦点を当てた本書の後半では，他者の喪失や痛みや苦悩，そして自己の内なる「他者性」がひと繋がりとなって，激しい動揺を生み出すような関係性の広がりのなかで，しかし固有の生／人格を認めながら他者と繋がろうとする生のかたちが生き生きと描かれている．

最後に，著者はシンハラ語を修得し，彼らのことばで日常の意味世界を理解しようと試みた．「パウ」や「カラキレナワ」「ドゥカ」といった現地語に対語的にことばをあてがう

のではなく，さまざまな事象を微細に描きながら，ことばの用いられ方や意味を丁寧に解釈し，その限界を超えるだけの厚い民族誌として仕上げている．本書から浮かび上がる「生きていても仕方がない」生を，「それでもなお生きる」人びとの姿は，著者が実践や自らのフィールドでの違和感から理論的枠組みを構築するという人類学的方法のなかで明らかにされている．彼らとともに濃厚な時間を生き，高齢者たちの生活を生き生きと描きだした本書は，一読者として「共にそこにいる」臨場感を味わえる立体的な民族誌であると考える．

引　用　文　献

中村沙絵．2011.「現代スリランカにおける慈善型老人ホームの成立―ダーナ実践を通したチャリティの土着化」『アジア・アフリカ地域研究』10(2): 257-288.

藤井千晶．『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか―タリーカとスンナの医学』ミネルヴァ書房，2018 年，272 p.

池邉智基 *

本書は，東アフリカのタンザニア共和国沿岸部に位置するザンジバル島における，民衆のイスラーム実践を詳細に描いた研究をまとめたものである．本書の目的は，タリーカ（イスラーム神秘主義教団）とスンナの医学（預言者ムハンマドの言行に基づく医学）の実践をとおして，東アフリカにおける民衆のイスラームを考察することである．この 2 つの対象はそれぞれ担い手も実践空間も異なる事例である．しかし両者に共通しているのは，ともにイスラーム的な伝統を受け継ぎながらも，ザンジバルの社会的な状況に対応しながら変容を続けてきた点である．その意味で著者の問題関心は一貫しており，本書では「教義としてのイスラームの普遍性」と「民衆の多様な実践」の記述を通じて，時代や社会的背景に応じて柔軟に「正しいイスラーム」へ向かうための再解釈が続けられてきたことが詳細に示されることになる．

本書は全 4 部構成，全 13 章である．それぞれの章を概観しよう．

序章では，東アフリカのイスラーム研究の歴史が概観される．これまでの研究ではイスラーム知識人の活動や著作についての蓄積はあるものの，民衆レベルの実践についてはイスラーム的な要素が議論の中心に置かれないまま，儀礼や民間信仰，シャーマニズムなどを中心とした調査がされてきた．そのために東アフリカでは中東に比べて遅れた「田舎イスラーム」が実践されているという認識が絶えず存在していたことが述べられている．

第 I 部では，東アフリカにおける民衆のイスラームについての先行研究が概観される．第 1 章では，「民衆のイスラーム」とイスラームがもつ地域性について，これまでの研究とその問題点がまとめられている．まずイスラーム知識人などの宗教的権威に属する「公式イスラーム」（ないしは「規範的イス

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科